

鳶ヶ巢城跡の麓・東林木町阿土谷町内の南方の田園地帯が通称「登立(のぼりたて)」と言われていました。

鎌倉時代末、承久の乱(南北朝期)後の林木は藤原家の荘園支配が衰退して地方の在地領主が武士として勢力を拡大していました。また大寺や鰐淵寺(浮浪山)への参道を中心にして栄えてはいましたが、名主の支配下で住民は団結してわずかな田畑で懸命に生きていたそうです。

そして室町から安土桃山の時代いわゆる戦国時代になると鳶ヶ巢城が山砦城として築造され、城下の荒地の一角に幟旗をあげる施設が作られました。鳶ヶ巢城を陣取った武将の威嚇を示すには幟旗をあげる必要があったからです。

戦国時代には部隊の識別という点で最も重要視されていたのは軍旗であると言われていました。

特に全軍の目印となる総大将の旗は命を捧げるほど大事なものであったようです。

昔の運動会や遊びに、「旗取り合戦」というスポーツがありました。それは、戦国時代における戦闘の名残とも言われています。

武田信玄の「風林火山」の旗や、徳川家康の「厭離穢土欣求浄土」のようにスローガンのものを書き出した旗の他に、大名の家紋を染め抜いたものなどが使われることが多かったようです。

ここの「登立(のぼりたて)」で揚げたと思われる幟は恐らく宍道家の家紋を染め上げた四つ目結びの旛しるしであったものと思われます。この四つ目結の家紋は、宇多源氏を祖にもつ近江の佐々木一族の有名な家紋です。

昔「登立」と呼ばれるこの地に幟旛が威勢良く揚がっていた時代に、林木の人々が生きる為に右往左往し戦乱に巻き込まれて混乱している姿が目に見えます。

